

新しく発見された「ダンジョン」の隠し部屋。

ギルドからの依頼は、危険性の有無の確認——S級冒険者の俺にとっては造作もない仕事のはずだった。

扉を開けると、中は静まり返っていた。

広間の中央に、ぷるんと小さなピンク色のスライムが一匹いるだけ。

「……なんだ、こんな可愛い奴がいるだけか」

透き通るように柔らかく、光を反射してきらめいている。

敵意も気配もない。跳ねるたびに、ゼリーみたいにぷるぷる揺れて……妙に愛嬌がある。

——そう思った矢先だった。

「うおっ！？」

突如スライムが跳ね、俺の胸元に飛びついてきた。

温かいゼリー状の身体がぴとっと張り付く。

「……？　なんだこれ、ただのスライムだろ……」

最初は軽く引き剥がそうとした。

けれど、スライムは粘着質にぴったり貼り付き、じゅるっと音を立てながら身体を這わせてくる。

次の瞬間——布が、音もなく溶け始めた。

「なっ……！？　お、おい待てっ！」

胸当ての下のシャツが、じゅくじゅくと泡立ちながら溶け落ちていく。

熱い液体をかけられたみたいにじんわりと広がり、肌が露わになった。

「くっ……やば……ッ!？」

腰のベルトに絡みついたスライムが、ぬるんと這い上がってくる。

そこを中心にズボンの布地までもがじゅるじゅる溶け、太腿にまでぬるりとした感触が広がった。

「っ……や、めろ……!」

必死に振り払おうとしても、逆に全身を包まれていく。

ぬめる感触は冷たさと温かさが入り混じり、妙に生々しい。

胸も腹も、じわじわと露わにされていく。

「はっ、くそ……! 服が……全部……」

目の前でぷるんと震えるピンク色。

ただの小さなスライムにしか見えないのに——確実に俺を丸裸にしようとしていた。

「はっ、くそっ……離れろ……ッ!」

必死に粘つく塊を掴もうと両手を伸ばす。

けれど指の間からずるずると滑り抜けて、何度掴んでも思うように力が入らない。

つるんとしたピンク色のゼリーは、抵抗を嘲笑うみたいに俺の竿へぴったり張り付き、びちゃびちゃといやらしい音を立て

続けていた。

「やッ……ッ……くそ、これ……はな、せ……っ♡」

じゅるっ、じゅぶう……♡

亀頭の先を中心に、まるで吸い込まれるみたいな感覚が押し寄せる。

上下に擦られているはずなのに、同時にきゅうっと吸い上げられる。

想像を超えた感触に、腰が勝手に震えてしまう。

「っ、ひっ……ああッ♡♡ な、んだ……これ……ッ♡♡」

ぎゅうううう……♡

包み込むゼリーが竿の根元まで吸いつき、今度は中でうねるように蠢いた。

粘液がカリの段差をなぞり、鈴口の先端を執拗に吸い付く。

空気を吸い込むみたいな音が耳に届き、視界が白く弾けそうになる。

「ひあッッ♡♡ あああ……っ♡♡ やっ……やめろっ……て……♡♡♡」

口では拒絶を叫ぶのに、股間は裏切るように脈打ち続ける。

逃れようと腰を引けば、その動きに合わせてスライムが竿を離さず、逆にぴったり吸い付いてきた。

ちゅぼっ、ちゅぽお……♡と先端を吸われるたび、背中が跳ねる。

「んんんッ♡♡♡ ひっ、やっ……そ、そこお……ッ♡♡♡」

鈴口を吸い出されるような感覚。

今まで女との交わりでも、一人で抜く時でも味わったことのない強烈な刺激に、全身が痺れたように熱くなる。

汗が首筋を伝い、指先まで震え出す。

「っあッ♡♡ だ、めだっ……で、出る……出ちまうッ……♡♡」

じゅるるるっ……♡♡

一層強く締め上げられ、まるで精を吸い尽くすために作られた器官みたいに竿全体が搾り取られる。

必死に腰を引いても、逃がすどころか追い打ちをかけるように吸われ、もう我慢なんてできなかった。

「っっっッ〜〜〜〜♡♡♡♡」

竿の先から熱が弾け、白濁が吸い上げられるようにスライムの中へ流れ込む。

吐き出す声は情けなく裏返し、俺はその場で膝を折った。

「はあっ……あっ……はあっ……♡♡」

肩で息をしながら、まだ吸い付いたままのゼリーを必死に剥がそうとする。

だがぬるぬるとまとわりつき、逆に竿をきゅうきゅう締め付けては、余韻を搾り取るように吸い続けていた。

「や……やめろ……っ♡♡ も、う……無理だっ……♡♡♡」

必死の拒絶も空しく、スライムは嬉しそうに震えながら、まだ竿にちゅぽ♡ちゅぽ♡と吸い付いて離さなかった。

「ひっ……！？ ま、待て……そっちは……っ！」

竿を包んでいたスライムの一部が、ずるりと先端へと集まり始めた。

ぬるんと粘液が鈴口を舐めるみたいに覆い——ちゅるり、とそこへ細い突起が顔を覗かせる。

「や……やめろッ！ そこは……入れる場所じゃ……っ！」

慌てて両手で竿を掴み、侵入を阻もうとする。

けれども粘液は指先をすり抜け、鈴口の先にぷにゅん♡と押し付けられる。

ひゅるん……と先端をなぞる感触だけで、腰が跳ねた。

「ひぁッ♡♡ だめっ、やめ……っ、くるな……ッ！」

必死に腰を引こうとしたその瞬間。

別の触手がびゅるんと跳ね、俺の顎を押し開いた。

「んぐっ……！？ なっ……むぐうう……っ！」

咄嗟に顔を背けようとするが、柔らかいのに力強い触手が舌の奥までずぷっと入り込んでくる。

どろりとした液体が舌に広がり、甘ったるい香りが鼻腔を抜けた。

「んんっ……！？ なに……これ……っ……」

飲み込むつもりなんてなかったのに、舌を這う甘さに喉が勝手に動いてしまう。

とろりとした液体を嚥下した瞬間、全身の力がじわりと抜けた。

剣を振るう時に鍛え抜いた腕にすら、まるで重りを付けられたみたいに力が入らない。

「つく……そ、だめだ……身体が……ッ……」

ぐにゅ……♡

抵抗を諦めたその隙を逃さず、スライムの細い触手が鈴口からぬるんと侵入してきた。

「ひああッ！？！？ や、やめええ♡♡♡」

ぞわぞわとした感触が、亀頭の奥にまで入り込んでくる。

細いのにしっかりと硬さがあって、尿道の内壁をにゅるにゅると擦り上げる。

「ひい♡♡♡ あッ、や……っ……♡♡♡」

鈴口がひくひく震えて侵入を拒んでいるのに、スライムの触手は一切止まらず、先端をくいと折り曲げては敏感な内壁をくすぐってくる。

尿道の奥をぐりゅぐりゅと蠢かされるたび、竿の根元がビクビクと跳ねた。

「ひぐう♡♡や、やめっ……そ、そんなとこ♡♡♡」

ぐちゅ、ぐちゅり……♡

膀胱の手前にまで迫る勢いで、触手は奥へ奥へと食い込んでいく。

尿道を押し広げながら、外から包み込む本体のぬるぬると連動して、竿全体を中と外から同時に責め立てられる。

「んんッ♡♡ ああッ♡♡♡ だ、だめ……っ、イ、くっ……♡♡」

甘い液体で力を奪われ、抵抗する術もないまま、竿はびくびくと痙攣を始める。

細い触手に尿道を犯される屈辱と、同時に押し寄せる強烈すぎる快感。

理性がどろどろに溶かされて、ただ腰を震わせ喘ぐしかなかった。

「ひい……ッ♡♡ あ……ッ♡♡ く、る……で、る……ッ♡♡♡」

竿が脈打ち、腰が勝手に突き上げられる。

熱が根元から駆け上がり、もう射精する感覚が確かにそこまで来ていた。

——なのに。

「なっ……！？ で、出な……ッ♡♡ でない……ッ♡♡♡」

尿道の奥に潜り込んだ触手が、まるで栓のように先端を塞ぎ込んでいた。

押し寄せる射精感を強引にせき止められ、出口を失った熱が

内側でぐるぐると渦を巻く。

その異様な感覚に、快樂と苦しみがない交ぜになり、視界がぐらぐら揺れた。

「ひあッ♡♡♡ や……やだっ……ッ♡♡ い、いかせ……ええ……♡♡♡」

スライムは容赦なく尿道の中をうねり、細い触手でカリの裏をぐりゅぐりゅと擦り上げる。

そのたびに竿は限界まで反り返り、射精の波が何度も押し寄せるのに——決して解放されない。

「くうッ♡♡♡ あああッ♡♡ で、でたいっ……♡♡ のにッ♡♡♡」

ぐちゅぐちゅと音を立てて、尿道の内壁を蠢く触手。

ぬるぬると先端をひねり、時にわざと奥をぐっ、と押し広げてくる。

それだけでも気が狂いそうなくらい気持ちいいのに、先端はしっかりと塞がれたまま。

「ひい……ッ♡♡ あ……ッ♡♡♡ し、んじ……られ、な……ッ♡♡♡」

竿の奥に熱が滞留し、射精できないままビリビリと痺れる。

頭の奥が真っ白になり、腰から上手く力が入らない。

なのに——スライムはますます嬉しそうに蠢き、まるで「もっと出したいだろう？」と挑発するかのように尿道をちょよちょよと責め続けた。

「や、め……っ♡♡ こ、れ……っ♡♡ く、る……のに……」

ッ♡♡♡ いけな……いッ♡♡♡」

気持ちよすぎて泣いているのか、いけない苦しさで泣いているのか、自分でも分からない。

ただ確かなのは、どれだけ喘いでも、どれだけ腰を震わせても——

出口を塞がれた竿は、射精できないまま延々と地獄のような快楽を浴びせられているということだった。

「ひいイイイ……ッ♡♡ や、だッ♡♡ いか、せてええ……♡♡♡♡」

その哀願すらも、スライムのぬちゅぬちゅという音にかき消され、ただ快感に溺れていくしかなかった。

「はっ……はぁっ……♡♡ も、もう……むり、だって……♡♡」

射精を塞がれたまま竿を責め立てられ、腰は勝手に痙攣し続ける。

解放されない苦しみの中で必死に喘いでいると——スライムの本体から、さらに二本の触手が伸びてきた。

ぴと……♡

「ひぁっ！？ な、なん……ッ♡」

胸板に吸盤のような感触が張り付いた。

触手の先端は丸く膨らみ、まるで搾乳器のカップみたいに乳首をすっぽり覆う。

次の瞬間、ちゅぽおお……♡ と音を立てて強烈に吸い付き

た。

「ひあッ♡♡♡ や……っ、ち、ちくび……ッ♡♡♡」

乳首が根元から引っ張られるように吸われ、ぞわぞわとした快感が背筋を駆け上がる。

しかも左右同時に、交互に、リズムよく強弱をつけて吸引してくる。

「んんッ♡♡♡ ひい……ッ♡♡♡ や、だ……ッ♡♡♡ きもち……い……ッ♡♡♡」

さらに——ちくっ。

「ひゃああッッ！？！？♡♡♡」

乳首の中心に、細い針のようなものが突き刺さった。

ほんの小さな刺激なのに、そこから火がついたみたいにジンジンと熱が広がっていく。

痛みは一瞬だけ。すぐにそれが甘い痺れに変わり、胸の奥までジワジワと快感が染み込んでいった。

「や……っ♡♡♡ あッ♡♡♡ な、んだこれええ……♡♡♡ ち、くび……あつい……っ♡♡♡」

熱くなった乳首を、触手は容赦なく吸い続ける。

ジンジン痺れる先端を、きゅぽっ、ちゅぽっ、とリズムよく啜り、内部で針が微かに蠢いては更なる刺激を送り込む。

「んんッ♡♡♡ ぐううッ♡♡♡ ち、ちくびいい……ッ♡♡♡ ……っ、やああ♡♡♡」

乳首から送り込まれる快感が竿と繋がり、全身をグルグルと駆け巡る。

出口を塞がれて射精できない竿はビクビクと痙攣し続け、乳首は熱く膨れ上がり吸われるたびに全身が跳ねた。

「やめッ♡♡♡ きもちよすぎ……て……ッ♡♡♡ し、ぬ……ッ♡♡♡」

乳首が搾乳器のように吸い尽くされ、尿道の中では触手が出口を塞ぎながら蠢く。

前も胸も同時に責められて、頭は真っ白に蕩けていった。

「ひ、う……ああッ♡♡♡ だめええ……♡♡♡ いきたいのに……いけないのに……♡♡♡」

涙を流しながら、ただ情けなく腰を揺らし、搾乳器のような触手に胸を吸われ続けていた。

「はぁッ……はぁッ……♡♡ あ……ち、ちくび……っ♡♡ くる……ッ♡♡」

竿は出口を塞がれたまま震え続け、乳首は搾乳器のような触手にきゅぽきゅぽと吸われている。

もう限界だと感じた瞬間——口元にぬるりと影が覆い被さった。

「んっ！？ んぐうっ……！！」

先ほどと同じ、いやそれ以上に太い触手が唇を無理やり押し広げて突っ込まれる。

舌の奥に触手が擦れ、喉を押し広げるように侵入してきた。

直後、どぷっ……どろお……♡

「んんッ！？！？ んうううッ……♡♡♡」

粘りつく液体が、直接喉奥へ流し込まれていく。

鼻に抜けるほど甘ったるく、どろりとした液体が胃に落ちるたび、身体の芯が熱に侵されていった。

頭が真っ白になり、視界の端が揺らぐ。

「んんうう……っ♡♡♡ は、はあっ……♡♡ あっ、なにこれ……ッ♡♡♡」

胸はジンジン痺れ、乳首を吸われるだけで腰が勝手に浮き上がる。

尿道の奥に触手を突っ込まれた竿は、出口を塞がれているのに脈打ち続け、破裂しそうなほど充血している。

「くうッ♡♡♡ で、でる……でるのに……でないッ♡♡♡」

その瞬間だった。

頭の奥で弾けるように、全身を突き抜ける波が走った。

「ひあああッ♡♡♡♡♡」

射精したはずの感覚——腰が跳ね、脳髄が痺れるほどの絶頂が押し寄せた。

けれど先端は完全に塞がれていて、白濁は一滴も解放されない。

熱と快感だけが脳を焼き、肉体を支配する。

「いっ……てる……っ♡♡♡ で、でてな、いのに……っ♡♡♡」

身体が錯覚する。

確かにイッた、でも射精はしていない。

それなのに、絶頂だけを無理やり叩きつけられて、腰がガクガクと痙攣し続けた。

「んううッ♡♡♡♡ あっ、あっ……♡♡♡ むり……ッ♡♡♡♡ あたま……おかしく……なるッ♡♡♡♡」

口に突っ込まれた触手はまだ甘い液を滴らせ、舌にまとわりつきながら喉の奥を犯し続けている。

乳首は針で熱く膨張したまま吸われ、尿道の触手は内部をこりこりと刺激しながら出口を塞ぎ続けていた。

絶頂を迎えても解放されない。

ただ「イッた感覚」だけを何度も浴びせられる、その地獄に喘ぐしかなかった。

「っ……はあ、はあ……っ♡ お……お……っ」

尿道を蹂躪していた細い触手が、ずるり……と音を立てながら引き抜かれていく。

奥を擦られながら、最後に鈴口をぬちゅりと舐めるように抜け出す感触に、思わず全身が震えた。

「っひゃ……ッ♡ やっ……うう……」

中に残った熱と快感の残滓で腰が勝手に跳ねる。

けれど解放された先端からはトロトロ♡とゆっくりしか射精が出来ず全身に気持ちよさが広がっていく。

先端がじんじんと痺れて、気持ち良くてたまらない。

ふと目を向けると――。

スライムの触手が、いま抜き出したばかりの自らの先端を口のように広げ、ずるっ、と呑み込んだ。

「な……っ」

ぞくりと背筋に冷たいものが走る。

まるで味わうように震えながらそれを“食べて”いる姿に、背筋が粟立った。

「ひっ……や、やめろ……っ、化け物……！」

恐怖に突き動かされ、床を這うように逃げ出そうとする。

だが――ぬるり、と背中に冷たい感触。

「なっ……！？ やめ……っ！」

あっという間に腰を絡め取られ、腕まで引き戻される。

力を振り絞っても、媚薬で抜け落ちた身体は言うことを聞かない。

ぬるぬるとした粘液が太腿に絡みつき、ぐいと尻を持ち上げられた。

「や……やめろッ！ そこは……っ、だめだ……ッ！」

視線を下げると、別の触手が尻の割れ目へと這い寄っていた。

ゼリー状の先端がぷるぷると震え、まるで獲物を見つけた舌のように蠢いている。

ぬちゅ♡……ぬちゅ♡

「ひっ……やあっ……♡♡」

割れ目をなぞるたび、ぬるんとした熱が皮膚に広がっていく。
入り口を押し広げるように先端が当たり、じゅぷ♡と粘つく音が響いた。

「やっ……やめっ、来るな……ッ♡♡」

逃げようともがけばもがくほど、腰を押さえつける触手は強くなる。

後ろへと伸びた細い突起が、ぬちゅ♡と音を立てながら孔へぬるりと擦り付けてきた。

「ひ……ッ♡♡　だ、めだ……っ♡♡♡」

尻の奥深くに、次の蹂躪が迫っている——その確信に、恐怖と同時に快感がぞわぞわと這い上がってきてしまうのだった。

「やっ……あっ……ッ♡♡」

ぬちゅ♡ぬちゅ♡といやらしい音を立てながら、尻の奥へと触手がゆっくり侵入していく。

入口を押し広げられるたびに、柔らかい粘液が熱を孕んで流れ込み、体内をじゅぷ♡じゅぷ♡と満たしていった。

「ひあっ……♡♡　お、奥に……く、る……ッ♡♡♡」

ねっとりとした感触が内壁を擦り、先端がぐりぐりと曲がっては肉襞を搔き回す。

腰が勝手に浮き、背筋を仰け反らせるたび、じゅぷっ♡じゅぷっ♡といやらしい音が鳴り響いた。

そこへ——別の触手が竿に絡みついた。

「やあッ♡♡ まえ、も……ッ♡♡」

鈴口をぬるりと塞がれ、茎の根元から先端まで、きゅっ♡きゅっ♡と締め上げられる。

出口は完全に封じられ、ただひたすら快感だけが中に溜まっていく。

「んんんッ♡♡ いっ……だ、だめ、で……ないのに……ッ♡♡」

竿の先から奥の前立腺にかけて、裏と内側から同時に責められる。

奥でじゅるじゅる♡と搔き混ぜられる感覚と、竿をぴちゃぴちゃ♡舐め回される感覚が重なって、理性を削っていく。

さらに胸へと伸びた触手が、ぷちゅりと乳首に吸い付いた。

「ひゃううッ♡♡♡ ち、ちくび……ッ♡♡♡」

先端が吸盤のように乳首を覆い、きゅぽん♡きゅぽん♡と吸い上げる。

じんじんとした熱が乳腺の奥へ響き、尻穴の奥で前立腺をこりゅ♡こりゅ♡と擦られるたび、全身が痙攣した。

「やっ……あっ♡♡　だ、だめえ……ッ♡♡♡　きもち、よすぎ……るっ♡♡♡」

後ろでは触手がじゅぷ♡じゅぷ♡と奥までゆっくりと出入りし、内壁をぐりゅぐりゅ♡と掻き回す。

前は竿を締めつけながら鈴口を吸われ、乳首はきゅぽ♡きゅぽ♡と搾乳されるように吸われる。

三方向から同時に責め立てられ、逃げ場のない甘い地獄に囚われていく。

「もっ……や、めええ……♡♡♡　おれ、くるっ……ッ♡♡♡　♡　しんじや……う♡♡♡」

理性も羞恥も溶け崩れ、俺はただ、快楽に喘ぐ声を上げるしかなかった。

「ひゃッ♡♡　な、なに……っ、あッ♡♡♡」

じゅぷ♡じゅぷ♡……ぬちゅ♡ぐちゅ♡

尻穴をぐりゅりと掻き回していた触手が、不意に一箇所へぐいっと押し込んだ。

「ひううッ♡♡♡　や、やっ、やめえッ♡♡♡」

そこを押された瞬間、視界が白く弾けた。

頭の奥にまで快感が突き抜け、腰がガクガク震えて床に爪を立てる。

今までとはまるで違う、電撃のような甘さ。

(な、なにこれ……っ♡♡ こんなとこ……しら、ない……ッ♡♡♡)

困惑して声を上げる間もなく、触手はそれを確信したかのように動きを変えた。

奥の一点をこりゅ♡こりゅ♡、こちゅ♡こちゅ♡と執拗に擦り立てる。

「んんんッ♡♡♡ あっ♡♡ そ、そこ、だめええ♡♡」

じゅぷっ♡じゅぷっ♡と往復しながら、同じ場所を角度を変えて叩きつける。

トン♡トン♡と律動的に前立腺をノックされたかと思えば、ぐりゅ♡ぐりゅ♡と捏ねるように押し潰される。

「はッ♡♡ ひあッ♡♡ んんッ♡♡♡ そ、そこばっか、やめええッ♡♡」

腰が勝手に浮き、喉からひゅうひゅうと情けない声が漏れる。射精できないよう塞がれているのに、そこを責められるたび精液が押し出されそんな感覚に全身が痙攣した。

「ひああッ♡♡♡ し、しらな、いつ♡♡♡ こんな、きもちっ……いいとこ……ッ♡♡♡」

奥でじゅるじゅる♡と泡立つように触手が動き、前立腺を徹底的に撈りあげる。

竿は竿で絡みついた触手に締め上げられ、鈴口はぴちゃ♡ぴちゃ♡と吸われ続けている。

「やめええッ♡♡♡ も、むりいい♡♡♡ しんじやう、しんじやううう♡♡♡」

快感が限界を超え、床に崩れ落ちながら叫んだ。

それでもスライムは動きを止めず、前立腺を これでもか と擦り潰すように責め続ける。

「っはあッ♡♡♡ あッ♡♡ ああ、♡……っう……ッ〜〜〜
〜〜〜♡♡♡、あああッ♡♡♡♡」

涙と涎を垂らしながら、俺はただ甘すぎる快感に翻弄され続けていた。

「はあっ♡ あっ♡♡ ま、まって……ッ♡♡♡」

前立腺をしつこく擦られて、腰が勝手に浮き上がる。

ぬちゅ♡ぬちゅ♡といやらしい音を立てながら、スライムの細い触手が竿の奥を締めつけるたび、熱が根元からこみ上げてくる。

「やっ♡♡ そ、こばっか……ッ♡♡♡ だ、めえええ♡♡♡」

じゅぷ♡じゅぷ♡

前を扱かれているわけじゃない。乳首を摘まれているわけでもない。

ただひたすら、前立腺を重点的に突き、押しつぶし、こりこりと捏ね回される。

それだけなのに、竿の奥に白いものが勝手に溜まっていく。

「いっ♡♡ くっ……♡♡♡ くる……ッ♡♡♡ な、のに
……っ♡♡♡」

けれど、鈴口はぷるんとした膜にぴたりと塞がれていた。
出口を失ったまま、精が根元から先端へ押し出される感覚。
ぴくぴくと震える竿の芯を、熱が往復していく。

「だ、めっ♡♡♡ で、出せないのにな♡♡♡ しゅごいっ♡♡♡」

じゅぽん♡ ぐちゅ♡

刺激の波が前立腺から射精管を這い上がるたび、射精する瞬間のあの感覚が全身を支配する。

けれど実際には一滴も出せない。

射精と不射精が同時に押し寄せる、地獄のような快感。

「ひああッ♡♡♡ おしっ♡♡♡ で、でちゃ……ッ♡♡♡ でないのにな♡♡♡」

竿の奥が勝手に収縮して、搾られる。

熱く粘つくものが出口まで運ばれるのに、そこを塞がれて行き場を失う。

限界まで膨張し、破裂しそうに脈打つ。

「くる……ッ♡♡♡ イく、のにッ♡♡♡ でないっ♡♡♡ もう……ッ♡♡♡」

耐えきれず腰を跳ねさせ、背を反らせる。

それでも前立腺への責めは止まらない。

竿全体が熱で痺れ、頭が真っ白になっていく。

「んああッ♡♡♡ やっ♡♡♡ で、でるううう♡♡♡」

前立腺をぐりゅ♡ぐりゅ♡と捏ね潰されるたび、竿の奥から
せり上がる熱が暴発しそうになる。

出口は封じられているのに、射精の瞬間の収縮だけは止めら
れない。

「ひぐううッ♡♡♡ やめえ♡♡♡ でちゃ……♡♡♡」

次の瞬間——鈴口を覆っていたぷるぷるの膜がすっと開いた。

途端に、せり上げられていた精液が じゅるる♡じゅぽっ♡
と音を立てて吸い込まれていく。

「ひああッ♡♡♡ あああッ♡♡♡ で、でるのおお♡♡♡」

竿の根元から先端へ、白濁が押し出される。

そのままスライムの触手に啜り上げられ、ぬるん♡ぬるん♡
と吸い尽くされていく。

精が吐き出される快感と、すぐさま啜り取られる搾取感覚が
重なり、背筋がぞくぞくと痺れた。

「やああッ♡♡♡ だめええ♡♡♡ しゅごおいッ♡♡
♡」

じゅぽっ♡じゅるっ♡

根こそぎ搾り取るように、精管から精液が引き抜かれていく。

自分の意思なんて関係なく、熱い液体が勝手に吸い出され、
スライムの体内に飲み込まれていく。

「やめっ♡♡♡ もう、でな……っ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああ

あああッ♡♡♡♡」

何度も収縮を繰り返し、残っていたものまで無理やり搾り取られる。

じゅるる♡じゅちゅっ♡といやらしい音を立てながら、最後の一滴まで啜り尽くされた。

そして——。

「ひゃッ♡♡♡ あ……っ♡♡♡」

触手が、するりと竿から引き抜かれた。

出口が開放され、ぐったりと力の入らない竿の先から——。